

ひまわりからの メッセージ

115号

2021.3.8

NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

春のプレゼント



二、三日、養老から安八町に向かて揖斐川の堤防を車で走っていました。菜の花が目に入りました。雪をかぶった伊吹山、そして遠くに白山、東には御嶽山、信州の山々まで霞んでいます。その時、中学校で習った短歌がふと思いで出されました。

とおとうみ

遠江大河流るる国なれば菜の花咲きぬ富士を彼方に あなた

遠州、今の静岡の富士川でしょうか。作者は覚えていませんが、その情景を想像して富士山にあげられたことを思い出したのです。あれから何十年経ったのだらうと遠き日を懐かしみ、春の息吹を感じつつ次の訪問地に着きました。

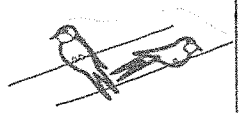
安八町での学校訪問を終えて堤防下の道に出ると、かがみこんでおられる女性の姿が見えました。窓をあけて「何をしていますか、土筆ですか。」と、声をかけてみました。その方は「

そう。土筆なんだけど、もう遅いくらい。頭の固いのがなくて、ほうけてるよ。降りて見てみたう。」と言われます。幸い車の通りもなかったので、車を降りて近寄ってみました。つくしは堤防のあちこちにいっぱい伸びています。はしゃぐ私に、「何ならあげようか。主人も七くなつて私一人では食べきれないからね。」と言われます。つくしは大好物だけど摘む時間の余裕がなかった私には、ここ数年は縁のないものだったので、すっかり嬉しくなり、お言葉に甘えていただいて帰りました。

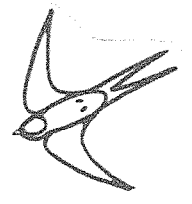
コロナ禍では事以外の人との出会いが少なくなっている昨今ですが、見知らぬ方から大好物の土筆と温かい心をいただいて、ほっこりと満ち足りた一日を過ごしました。

春は、別れと出会いが交錯する季節です。出会いがあれば必ず別れはあるものと思いつつも心は様々な思いに揺らぎ、平静さを欠くこともあるかもしれません。

この一年、今までは異なる学校生活を送った子どもたちが巣立っていきます。そして、又、新しい環境が子どもたちを待っています。園から小学校、小学校から中学校へという引き継ぎ会が続いていますが、その会は、学校に要望を出す会ではなく、家庭の役割を再度見直す機会でもあります。生きていく自立の力は生活の中にあるのです。子どもたちが、どうか幸せに心豊かに!! 私の願いです。



命の重さ



昨日、五歳の子が母親とそのママ友によって餓死させられたというニュースがとび込んできました。心が痛みました。

コロナ禍での虐待の増加や自殺の増加、生活苦などのニュースにも為す術もなく、日々を送っているというのが私の今ある姿です。でも、先日の孫の報告から、命の重さということについて書いておこうと思いました。

実は県外に住む男の孫が妹とけんかをして「消えろ」「死ね」という言葉を浴びせたそうです。娘は聞きとめて叱ったそうですが、その数日後、孫の学級の担任の先生が子ども達に「お父さんやお母さんから『死ね』とか『消えろ』』と言われたことのある人？」と聞かれたことがあつた。するとクラスの三分の一の子が「言われたことがあつた」と答えたそうです。「アニメの世界でなく、家庭の中でそういうことは子どもに浴びせられていること、しかもその数の多さに驚いた」と娘が知らせてきました。

孫は酸欠の摂取量が足りないのを理由に、生後二日目にNICUに送られました。その時原因は分かりませんでした。やっとNICUを出て、退院したもののすぐに発熱、息が苦

しくなるという状況が続き、入院を繰り返しました。三歳の時には、人工肺(エクモ)を装着し「明日の命はもうらん、今、この瞬間に命が絶えてしまうかもしれないという不安と恐怖に襲われ一睡もできない、眠ったら死んでしまうのでは……」と思ったと娘は思い返していました。そして「自分の子の命がもう助からないかもしれない」という思いをしたことがある人なら、子どもに向かって「消えろ」「なんて言えないと思う。」と言っていました。

それにしても、孫のクラスの担任の先生は、なぜそんな質問をされたのでしょうか。クラスの中でそういうことは飛び交っていたのでしょうか。孫にしても、家では決して使われないことばです。そのことばのもつ意味をこんこんと諭したそうですが、親さんからそういうことばを言われた子どもたちはどう思うのでしょうか。

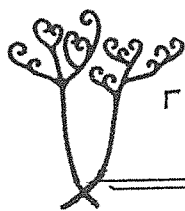
「くそババア」とか「うざい、あっちへ行け」。等という暴言について、私は大人に対する出まかせのことばに對してはいちいち反応せずにはいまいしょう。と言います。そういうことばの裏には、おそろく心の寂しさや自分にもっと目を向けてほしいという注目要求などがかくれているのでしょうが、そういう暴言にはいちいち惑わされたいことも大人として大事なことだと思ふからです。「あ、そう」と一応聞いたことは応じておき、別の話題に切りかえて、子どもの気持ち落ちついたのを見はかかって「〜」と言って欲しかったなあ。とヤリ気なく言っておきたいものです。

子ども同士の暴言には、さすがに介入する必要がありません。しかし、「あなたが言われたら悲しいでしょう。」という例え話は通じない子もいます。「両親に言われている子であれば「たっママだって言うもん〜」と反発するかもしれませんが、「そんなことは言っちゃダメでしょ〜」と否定語を言うよりも、「やめようと言えば良いよ。」とか「そんなこと言わんとって言って言うといいよ。」とか、どういふ発言や行動をするのがいいのかを根気よく話していくことでしょう。

今の子どもたちは肉親の死に出会うことが少ないと思えます。ペットを飼っている家であれば、その死に出会うこともあるでしょうが、社会のしくみが人の命の重さも感じさせないようになっているのかもしれない。

死ということ、死の意味を学ぶ機会の少ない子ども達はアニメや映像の中で知った気になっていくのでしょうか。死は宗教や哲学とも結びついていますから、教育の場で教えていくにも難しさがあるのでしょう。だったら、せめて家庭では、子どもがどんなに悪戯をしても、どんなに子どもに腹が立っても、「死ね〜」や「消えろ〜」は禁句だと思おうのです。

お子さんが誕生した時のことを思い出してみましよう。かけがえのない一つの命を、いつくしんで見守っていくことが大人の役割だと思おうのです。



S・E・N・S (特別支援教育士) 「性について」研修会

日本LRO学会の連携資格として、特別支援教育士という制度があり、県内にも多くの有資格者がいます。通称S・E・N・Sと言っています。その会の二月と三月の研修会は「性について」でした。

講師は小栗正幸先生と國分聡子先生でした。お二人の紹介をさせていただきます。

○小栗先生・法務技官として各地の矯正施設で勤務され、宮川医療少年院長を経て退官。その後特別支援教育の現場で活躍され、著作も多数出されています。

○國分先生・現在、静岡県立清水特別支援学校教諭で児童福祉司、上級思春期保健相談士。以前はケースワーカーとして虐待、非行、不登校対応もされてきました。教員として文科省から賞を受けられています。

このお二人が共著で「性の教育ユニバーサルデザイン」も出版されました。副題には、「配慮を必要とする人への支援と対応」とあります。(金剛出版)確かに性被害にあう子ども達は、後をたたく。しかし、学校の保健体育の授業の中で性の教育がなされているかと

言えば、諸外国に比べると、まだまだということになるでしょう。日本人の国民性もあるでしょうが、性の問題をあきらめずと語ることはタブーとされてきたのではないのでしょうか。園分先生も授業を参観にきた教育者員会の人にそういう授業はもつてのほかだと叱責を受けたこともあったということでした。

この世の中に男性と女性がいる、性差があること、そして性の問題は全その人の問題なので、お二人がこの本を書くにあたって様々な葛藤があったのだらうと思います。けれど、非行少年や、少年少女の性的逸脱行動に身近で接し、彼らを支えて来られたからこそ、書くべきだと考えられたのでしよう。

本は四部構成になっています。帯封で紹介すると、

第一部……「いっはいあってな」を通して、あなたも私も経験した、あるいは経験する可能性のあった性体験を共有していただいで次へ進んで下さい。

第二部……配慮を必要とする人への性に関する教育とは何か。

第三部……介入、性的逸脱行動が起こっている人への支援とは何か。

第四部……LGBT 新しい支援のあり方とは何か。

そして付録として巻末には実際に教育現場での指導に役立つ「中学校期に学んでおきたい性の学習プログラム」や「高等部三年間の年次計画などが収録されています。

「せひとも本書をあなたの身近なものにしていただき、それをあなたの子育てや支援活動に役立てていただければ、私たち共同執筆者の最たる光栄と思うところであります」というメッセージに、私たちは、いえ、私はどれだけ応えられるのでしょうか。

SNSを通して、見えない所でつながりを求めていく子どもたち、そして、少年少女をえじきにしようとする待ちかまえている大人たち。時折襲ってくる無力感に押し流されないように、踏んばっていかなくてはと思います。どうか、お願いします。家庭でも学校でも、その子の居場所を作っておいて下さい。私は、この本をまた読み終えています。せんが、身近な所でできる支援があると思っています。皆さんもせひ一読下さい。

お知らせ



今後のセミナー親の会について

4/12・5/10 スイトピアセミナー 6F2です。
コロナ対策をしています。ご協力ください。